

JICA 中国事務所ニュース

2011年11月号

【トピックス】

- ◎ 循環経済の実現に向けて 2

【ニュース】

- ◎ 昨年からさらにパワーアップして研修内容を拡充 3
- ◎ 中国の環境政策関係者と日本の経験・知見を共有 3
- ◎ 丹羽大使がトキを放鳥 4
- ◎ 中国初のアジア湿地シンポジウム、無錫で開催 5
- ◎ 青海日本文化祭でODAパネル展を開催 5

- 【寄稿コーナー】 6

- 【帰・赴任者コーナー】 7

- 【China Cool】 7



丹羽大使の草の根技協案件視察(寧夏)

皆様からのご感想やコメントをお待ちしております。

編集室担当：shenxiaojing.cn@jica.go.jp

- ☆ 中国事務所ウェブサイト <http://www.jica.go.jp/china/office/index.html>
- ☆ ボランティア活動 <http://j.people.com.cn/99005/index.html>
- ☆ サーチナ JICA ページ <http://searchina.ne.jp/jica>

トピックス

循環経済の実現に向けて ～循環型経済推進プロジェクト中間成果発表会開催～



「中国の持続的な発展には、循環型経済の構築が不可欠。プロジェクトを通じて、中国の資源循環の一層の構築を推進したい」。環境保護部国際合作司の徐慶華司長の挨拶で幕を開けた「循環型経済推進プロジェクト」の中間成果発表会。これにこたえる形で、日本側からは『『足るを知る』の価値観を共有する日中両国の協力の意義は高い』（日本大使館山崎公使）、「民間企業をはじめとする方々との連携を通じて初めて実現する循環経済」（JICA中川所長）との挨拶が続きました。

循環型経済推進プロジェクトは、中国政府が2009年に制定、施行した循環経済促進法の趣旨を踏まえ、持続可能な発展の実現に協力すべくJICAと中国環境保護部が協力して実施しているプロジェクトです。本プロジェクトでは、循環型経済推進のための課題を、資源投入・生産から廃棄・処分に係る一連のサイクルに沿って4つ（①環境に配慮した事業活動の推進、②国民の環境意識の向上、③静脈産業類生態工業園（エコタウン）整備の推進、④廃棄物の適正管理の推進）に整理し、その各々をサブプロジェクトとして位置づけ、活動を行っています。

今年は本プロジェクト実施期間（2008年10月～2013年10月）の中間地点にあたるため、これまでのプロジェクトの成果を広く共有し、今後の活動の参考とするため、10月26日、北京市内の日中友好環境保全センターにて中間成果発表会を開催しました。日中環境協力、環境ビジネスに関わる両国の政府関係者、民間企業、学術研究者など、合計で約120名が参加しました。

中国側からは本プロジェクトの成果として、上場企業環境情報公開ガイドライン案（2010年9月発布）、企業環境報告書作成ガイドライン（2010年6月発布・2011年10月施行）、企業環境監督員制度の制度案や教材（6分野）の開発、試行的研修（約8000人）の実施について報告されました。また、日中友好環境保全センター内に開設予定の「環境技術情報プラザ（仮称）」で活動する予定の環境解説ボランティアの育成研修が実施されるとともに環境教育教材（教師用・学生用）が完成したことが紹介されました。

廃棄物適正管理に関する協力では、中国に最適な管理分類として17種類の廃棄物分類リスト及び28種類の廃棄物統計リストの完成が紹介されるとともに、ダイオキシン類簡易測定法に関する技術マニュアル案の完成とその改善にむけた取り組みが紹介されました。

一方、日本側からは日本がこれまでに経済発展と環境汚染拡大の経験をもとに築き上げてきた環境保全体系の紹介と課題解決の歩み、エコタウンの枠組みなど、循環型社会の推進状況についての解説が行われました。その中には、「公害防止管理者制度」に関する不正事例とその対策や、「生活ごみ焼却施設の建設」に関する問題の解決に必要な住民参加の重要性など、現在中国が直面している課題へのヒントが含まれています。

参加者からは、「中国の循環型経済の推進状況や今後の政策の方向性が一度にまとめて理解できた」、「今後自分が担当業務を推進する上での参考になった」、「日本の環境政策の最新動向を具体的に理解できた」などといった感想や、本プロジェクトのさらなる成果達成への期待など、様々な意見が寄せられました。

中国政府は2009年に循環経済促進法を制定・施行し、持続可能な発展の実現に向けた取り組みを推進しています。本プロジェクトでは、引き続き環境保護部、日中友好環境保全センターならびに日本環境省と協力し、企業、自治体や研究機関等と連携しながら、循環型経済推進に向けた取り組みを行っていきます。

（所員 那須毅寛）

**昨年から更にパワーアップして研修内容を拡充
～中日友好病院との合作で院内感染対策を推進～**



中日友好病院との「衛生技術プロジェクト」では、この度、プロジェクト2回目となる現地研修を1カ月にわたり、内陸部の病院医師約50名に対して実施しました。プロジェクトのテーマはSARSのアウトブレイク以降、中国政府として力を入れている院内感染対策。「院内感染」と聞くと恐ろしい医療事故のように捉えられがちですが、どこでも起こりうる、病院にとってごく身近で日常的な課題なのです。

今回の現地研修は3つの特色があります。まず、第一に、研修カリキュラム。プロジェクトでは中日友好病院感染症主任を中心としたタスクフォースを形成し、研修生のニーズに沿って1ヶ月間の研修カリキュラムを策定しました。感染制御の基本の「き」である手洗いの遵守・モニタリングから、抗生物質の適正使用、アウトブレイク時の対応まで、豊富な研修内容となりました。

第二に、JICAが2008年末までSARS発祥地・広州で実施した「広州市院内感染対策プロジェクト」の成果活用です。昨年は同プロジェクトの実施機関である広州医学院第一附属病院から講師派遣を行いました。今年は研修生が広州へ出向き、実地研修を受けました。百聞は一見に如かず。プロジェクト終了後も病棟・科室をまたいで機能する「感染コントロールチーム」の活動を肌で感じ、研修生は大きな刺激を受けました。

最後に、中日友好病院と古くからパートナー関係にある国立国際医療研究センター（NCGM）からの講師派遣です。医療センターには、今回の現地研修に先立ち、9月に本プロジェクトの訪日研修生を受け入れて頂いており、講師を務めた大曲医師と窪田看護師のお二人が引き続き訪中しました。訪日研修に参加した青海省第四人民病院の馬院長の招聘を受け、初中国にして青海省を訪れたお二人。病院視察のほか、省内主要病院の約100名を招集して講習会を実施し、日本の院内感染対策のシステム、知見を広く共有しました。

「感染症は日中共通課題。このようなネットワークは大事です」とは大曲医師の声。訪日研修と現地研修が主体となるプロジェクトですが、限られた投入を効果的に組み合わせ、来年に向けて更にパワーアップしていきます。（所員 小田遼太郎）

**中国の環境政策関係者と日本の経験・知見を共有
～原科教授による講演会を開催～**

JICA 中国事務所は日中友好環境保全センターと共に、環境アセスメント分野における日本の第一人者である原科幸彦東京工業大学教授をお招きして、「中国の持続可能な開発のキーワード～環境アセスメント」と題した講演会を開催しました。

講演会は、中国環境保護部、日中環境保全センター、環境NGO、学識者等、約80名の聴衆を集めて、10月27日の午後、日中友好環境保全センターにて行われました。

講演では、原科教授より、

- ① 日本の環境アセスメント制度の歴史、
- ② 環境庁(当時)が名古屋市の廃棄物処分場計画に対して計画の見直しを求め、結果的にラムサール条約湿地として保全された名古屋市藤前干潟の事例、
- ③ 環境アセスメントの要件として、合理的(科学的判断)、公正(情報公開、公開の場での住民参加)、効率性(時間、コスト)が重要であること、
- ④ 日本の環境アセスメントの課題と改善策(小規模な事業についても簡易的な手続きで環境アセスメントを実施し、公共事業の環境社会配慮を行うこと、また、戦略的アセスメントを導入し、経済、社会、環境面の統合的なアセスメントを行う事)

など、日本の環境アセスメントに関する教訓の説明と中国に対する提言が行われました。

講演後の質疑応答では、参加者より、日本の環境アセスメントの特徴とその背景、日本の環境対策が実効性を有した理由、環境に関する市民啓発の方法等について質問が行われました。

これに対して、原科教授から、日本は経済成長と合わせて公害対策が行われてきた歴史から、大気・水質等の分析技術が高度であり、厳格な基準の設定とその遵守がその遵守が環境行政のひとつの特徴であり、モニタリングと結果の情報公開が進んでいるとの説明がありました。そして、環境アセスメント制度の実効性を高めるためには、環境アセスメント制度のみならず、行政手続法、情報公開法等のシステムを総合的に整備し、機能させる必要があること、また、市民の啓発のためには、開かれた会議の場の設定と情報公開、そして、ファシリテーターとなる専門家の役割が重要である点について回答がありました。

講演の後、原科教授より、「日本の経験についての共有の積み重ねが中国の持続可能な発展に寄与し、更には、世界の持続可能な発展に寄与する形で生かされて行くという、大きなシナリオを視野に入れながら、中国に対して知的貢献を行うのが、これからの日本の ODA の重要な役割です」とのコメントも頂きました。

中国事務所としても、このような協力を続けていきたいと思えます。

(所員 呼斯楽)

丹羽大使がトキを放鳥



2011年10月29日、丹羽大使が「人とトキが共生できる地域環境づくりプロジェクト」のサイトの1つ、陝西省寧陝県を訪問されました。大使は草の根無償でつくられたトキの野生復帰施設を視察後、トキを放鳥し、中国側関係者と意見交換されました。地元の農家から「トキを大切にしているが、トキの生息環境を守るために農薬が使えず、作物の収量が減った」との悩みを打ち明けられた大使は、無農薬作物の販売を何とか支援したい、との意向を伝え、さっそく対応策について JICA 専門家と相談されました。大使の訪問を機に、人とトキが共生できる環境づくりがますます進んでいくように思います。

(所員 足立佳菜子)

中国初のアジア湿地シンポジウム、無錫で開催！



2011年10月11日～13日まで、江蘇省無錫市で中国初のアジア湿地シンポジウムが開催されました。このシンポジウムは湿地保全に関する湿地保全の戦略や手法を検討するもので、シンポジウムの成果はラムサール条約締約国会議に提言されます。シンポジウムには25カ国から政府関係者、研究者、NGO、民間、学生等、約800人が参加し、会場は大盛況でした。

JICAはこのシンポジウムに協賛し、ブースも出展しました。また、JICAの湿地保全の取り組みや中国で実施しているトキと人の共生を目指すプロジェクトやコウノトリが生息できる環境づくりに取り組む草の根事業の発表が行われ、インドネシア、イラン、ミャンマー、ウガンダのJICAプロジェクトのカウンターパートが各国における湿地保全の取り組みを発表しました。シンポジウムを通じて自然も人も大切にするJICAの湿地保全の取り組みを国際的にアピールすることができました。

また、JICA事業に協力していただいている新潟県佐渡市や兵庫県豊岡市からも市長が市のトキやコウノトリの保護を通じた地域の環境保全や地域振興について発表されました。市長による発表は日本だけでなく、地域の活性化と生物の保護を両立させるための実践的な数々の取り組みは会場の多くの参加者の注目を集めました。

中国からも多くの事例や研究成果が発表され、中国の美しい湿地を紹介する多くのパネルも展示されていました。国際的に認知度や貢献度を高めようという中国の熱意を感じました。(所員 足立佳菜子)

青海日本文化祭でODAパネル展を開催



10月28日から30日の3日間、青海省西寧市において在中国日本大使館、青海省人民政府の主催により「2011青海日本文化祭」が開催されました。この一環として、JICA中国事務所は青海民族大学において「ODAパネル展」を出展し、日本の対中経済協力、ボランティア事業などについてパネルによる事業紹介を行いました。

初日の日本文化祭開幕式後、ODAパネル展に青海省張建民副省長が来訪し、過去30年にわたる対中経済協力の歴史や、現在青海省で実施しているJICA事業の説明を熱心に聞かれました。また、四川大地震発生時のJICA支援のパネルを前に、2010年4月に発生した青海省玉樹地震における日本の支援に対し、あらためて感謝の意が述べられました。

会期を通じ、パネル展には約2000人の来訪がありました。青海省には日本人が少ないこともあり、来訪した学生・市民たちは日本の対中協力や、日本に初めて触れた様子で、新たな交流の契機となりました。

日本文化祭全体では日中学生によるパフォーマンス、日本語スピーチコンテスト、茶道のデモンストレーションや日本映画上映など盛りだくさんのイベントが行われ、最終日には歌手のアミンさん・河口恭吾さんによるコンサートが開催されるなど、多くの市民・学生が日本と日本文化に触れました。(所員 黄濤)

丹羽大使ご一行の草の根技術協力プロジェクト視察 ～寧夏地区飼料用桑栽培及びその飼料化とそれによる羊(牛)の飼育法の普及～



このたび丹羽大使はじめご一行9名は寧夏回族自治区政府の招きにより、11月3日～4日に銀川市を往訪され、その際、4日午後2時本プロジェクトの銀川桑飼料調製センターを訪問されました。これは日本大使のはじめての草の根技術協力プロジェクトの視察ということで、プロジェクト関係者は、みな、大いに感動しました。

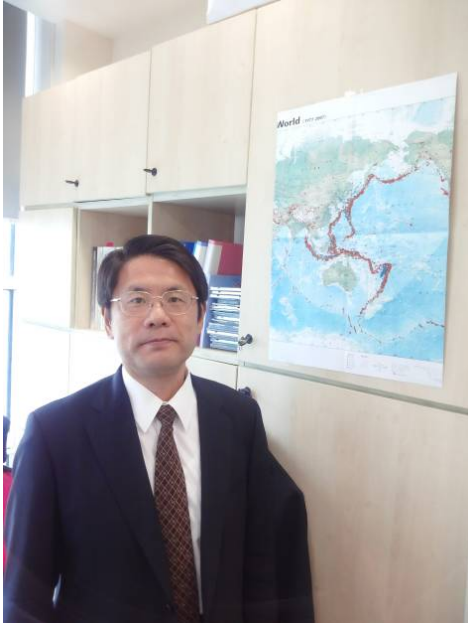
寧夏地域では、近年の砂漠化の進展で農民の貧困状況に拍車がかかる一方で、家畜の放牧が進み、草地在りますます破壊されるという悪循環に入っていました。同地域では、一時期、養蚕業が推進され、桑が盛んに栽培されたことがありましたが、その後の経済状況の変化等により養蚕業が頭打ちになったため、桑の木が余剰傾向となりました。ところが、桑の葉は、安価で家畜の飼料にも適しています。私たちは、2008年度から、この地で、桑の葉を飼料として農民に普及する取組を続け、現在は、桑による畜舎飼育が普及することによって、地域農民の現金支出が軽減されることを目的に、畜舎飼育、桑栽培の普及、混合飼料の最適配合比率の研究等を行っています。大使の視察対象となった銀川桑飼料調製センターは、プロジェクトの活動の拠点であり、桑の育苗園や羊・牛の飼育試験を行うための試験場、試験結果の分析施設等があります。

プロジェクト訪問当日、入り口には大使ご一行歓迎の幕が張られ、朱主任初め関係者一同が出迎えました。現場では羊の増加に應えるための畜舎(100m×25m)を建設中であり、前日まで工事現場そのものでしたが、そこを当日の午前にかけて整理をし、土の道に石灰を敷き、やっとVIPご一行を迎える体制に漕ぎ着けました。ご一行は現場関係者の案内により、羊の飼育状況、桑飼料(ペレット)の製造現場などを熱心に視察されました。筆者からは、羊の1日の給餌量、その種類は濃厚飼料と粗飼料があつて、桑は濃厚飼料の一部を成すこと、その中に占める桑の量は凡そ30%であることや、入り口を出たところのサイレージ槽では1槽350トン、2槽で700トンの桑の発酵飼料が出来、これで来年6月までの粗飼料が充足されること等をご説明しました。ご一行からは配合飼料の栄養価が高めるため、クコのジュウスを絞った滓を加えてはどうかといったアイデアも飛び出し、易林会社の徐総経理が「クコのみならず杜仲も混合したい」応ずる一幕もありました。ご一行はその後、サイレージ槽の上にも上がられ、実際にサイレージ槽から発酵された飼料が取り出されるところをごらんになりました。このようにして、密度の濃い視察の30分が瞬く間に過ぎ、大使ご一行は、記念写真も撮る間も無く、プロジェクトを後に次の訪問先へ向かわれました。

(プロジェクトマネージャー 八島継男)

帰・赴任者コーナー

長期専門家 チーフアドバイザー 浅見真二 ～耐震建築人材育成プロジェクト～



はじめまして、耐震建築人材育成プロジェクトの2代目チーフアドバイザーとして、11月1日に着任しました浅見真二です。

当プロジェクトは、四川大地震復興支援のまちづくり分野のプロジェクトとして、2009年5月に始まり2013年5月までの予定で実施中で、プロジェクト終了まで担当することとなっています。すでに2年強の活動期間を経て、数多くの本邦研修、中国国内研修を実施するなど、みなさんのご支援をいただきながら順調に進捗しております。私も、これまでの建築住宅行政の経験を糧に、引き続き円滑にプロジェクトが進むとともに、その後も効果的に展開されるよう、努力したいと思います。

中国本土に来たのは初めてで、また、海外勤務も初めてなため、いろいろ戸惑うこともあります。発展する中国の活力と歴史・文化に触れることにより、公私にわたりいろいろ得るものも多いと思っています。まずは、腰を据えて仕事に取り組むことから始め、できれば中国国内もあちこち見て回りしたいと思います。どうぞよろしくをお願いします。

CHINA COOL

マーラーシャンゴ（麻辣香鍋）



一見するとただの野菜炒め。でも、少しサイズが大きいのと思いませんか？後ろに写っている方と比較して、実物大を想像してみてください。ちょっとデカすぎです。

これは、マーラーシャンゴ（麻辣香鍋）という料理。3年程前から中国で流行し始めました。麻（マー）は、山椒のしびれる辛さ。辣（ラー）は唐辛子のピリツとした辛さ。辛さが香る（シャン）鍋（ゴ）は、唐辛子です。

食べ方は、大きなしゃもじで、唐辛子をかき分け自分の好きな具を発見し、ひたすら食べ続ける。これでは、一度で食べ飽きてしまうだろう、と思えるかもしれません。でも、なぜか、“また食べたいな”と思ってしまう、何とも不思議な料理。ちなみに、しゃもじを鍋と具の間にいれて、具を持ち上げ、箸でつついて食べる上級テクニックもあります。

“同じ釜の飯を食べる”という言葉が日本にはありますが、これは、直接、同じ鍋の具を食べる。親しい仲間と、思いっきりおなかを満たすには打って付けの料理です。でも、私が初めて食べたときは、具を注文しすぎてしまい、大変なことになってしまいました。くれぐれも食べすぎにはご注意ください。

(インターン 清華大学留学生 小林正弘)

★ 今後の予定

12月8日～9日 日中林業協力セミナー (北京長安大飯店)